

外国語としてのベトナム語概観

田原洋樹

1. ベトナム語を学んだ外国人
2. 現在のベトナム語教育
 - 2.1 北部でのベトナム語教育史
 - 2.2 南部におけるベトナム語教育史
 - 2.3.2 大拠点以外の国内状況
 - 2.4 国外の状況
3. ホーチミン市におけるベトナム語能力試験の運用
4. 今後の課題

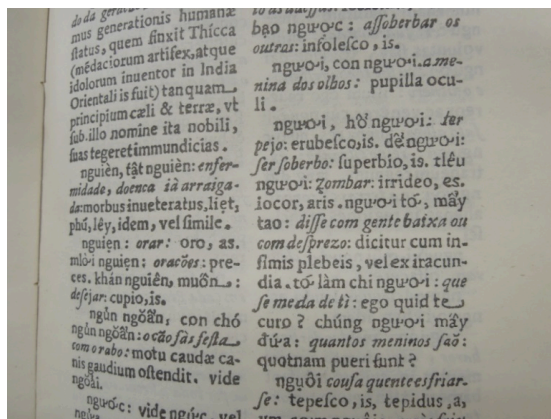
1. ベトナム語を学んだ外国人

今日、ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）および日本をはじめとする諸外国において教授、学習されているベトナム語はローマ字をベースにした表記法を用いる。近隣で行われる言語が、それぞれに独自の文字体系を擁していることから、初学者や言語研究および学習に全く関係のない人々に「意外」とか「何故に」と評されることが多い。

このローマ字によるベトナム語表記を *chữ quốc ngữ* (チャー・クオック・グー) と呼ぶ。

右写真はチャー・クオック・グーで編まれた最初のベトナム語辞典 *Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum* の復刻版¹ の中身で、オリジナルは1651年に刊行された。特筆すべき点は、この辞典がベトナム人の手によるものではなく、ベトナムで宣教活動に従事していたフランス生まれの宣教師 Alexandre de Rhodes が編纂した点であろう。ベトナム語を母語としない彼は、13歳のベトナム人少年からベトナム語を習い、わずか3週間で声調をはじめとするベトナム語の言語音を識別するようになったという²。

彼よりも前にベトナム語を学び、手書きのメモを残したポルトガル人、イタリア人の宣教師がいるので、Alexandre de Rhodes を「ベトナム語を学んだ最初の外国人」と呼ぶわけにはいか



¹ 1991年に Nhà xuất bản khoa học xã hội より出版された。2013年現在、書店での入手は困難。

² チャー・クオック・グー草創期の事情については Đỗ Quang Chính (1972) に詳しい。

ないが、辞典を編纂し、文字体系と正書法を後世に伝えていることで、その名を今にも残している。ホーチミン市には彼の名前が通りの名称になっている。

文字改革や正書法修正の試み、議論は幾度もあり、ベトナム戦争中には南北で正書法が異なる時期もあったが、大枠としてのチュウ・クオック・グーに変化はなく、むしろベトナム国内における位置づけは重要さを増し、漢字の使用が完全になくなった現在ではベトナム語唯一の文字体系である。

繰り返しになるが、この文字体系普及の礎となった辞典が外国人の手によることは、ベトナム語の「国際性」を論じるときに忘れることはできない。

2. 現在のベトナム語教育

さて、現在のベトナム語教育に目を転じてみると、1956年のハノイ総合大学における *tổ tiếng Việt*、すなわち「ベトナム語組」の発足を嚆矢とすべきであろう。

2.1 北部でのベトナム語教育史

当時のベトナム友好国の人士にベトナム語、ベトナム文化を教授することを主たる任務としてスタートした組織で、初期の留学生には、その後にベトナム駐在の外交官として戻ってきたものも少なくない。例えば、90年代にハノイの北朝鮮大使だったR氏はこの「ベトナム語組」の卒業生で、在学中にはホー・チ・ミン主席から自転車をプレゼントされたというエピソードが残っている。留学生のR氏とベトナム語で会話したホー・チ・ミンは「貴君が話すベトナム語は『教室のベトナム語』で、堅いねえ。私が自転車をあげるから、この自転車を漕いで人民の話すベトナム語をよく聞いてきなさい」と言い、自転車を贈呈した由である。R氏はハノイ駐在の大使を2回任ぜられている。

そして1968年12月には、この「ベトナム語組」を基礎として、*Khoa tiếng Việt*「ベトナム語科」が設立された³。大学教育としてベトナム語、ベトナム文化を正式に教授することが始まった。主として研究者の養成、さらには社会主義国の外交官のなかにベトナム専門官を養成する目的があった。

この時代のベトナム語学生としては、90年代後半にハノイ駐在のルーマニア大使を務めたA氏の存在が夙に有名である。テレビでの発言、社交の席でのスピーチや会話など、ベトナム人の知識人そのものに、ゆっくりと穏やかにハノイ方言を話す人物であった。一般に外交団はランクや序列に厳しい世界で、一随員に過ぎなかった筆者が他国の大使に直接面会することは困難である。しかし、同じベトナム専門という繋がりで見舞いを申し込んだところ快諾され、大使公邸で2時間余りにわたりベトナム語で歓談することができた。ほかに、ロシア大使館、中国

³ *Khoa*は漢越語の「科」である。原語を重視して「ベトナム語科」と訳されることが多いが、この「科」の長たる人物の名刺には英語で *dean* とあること、また、*khoa* の下部に複数の専攻が設置されていることから、日本の大学でいう「学部」に相当する部局と考えられる。

大使館のベトナム専門官とベトナム語で意見交換する機会を多く持ったが、ベトナム語運用力に関してはA氏に勝る人物はいなかった。

ベトナム語科が編集したベトナム語教材はハノイ総合大学での授業で使用されたほか、ハノイ総合大学の教員が客員教授などとして派遣された大学においても用いられた。東京外国語大学のベトナム語専攻でも長年にわたって教材に採用されていた。

詳細は稿を改めるが、教科書はその時代の社会や国際情勢を反映している。当時の教科書には2人称の呼称に *đồng chí* (同志) が出ていたり、登場人物の国籍はラオス、そして「ソ連」などの東側陣営が多かったり、今となっては面白いものであった。

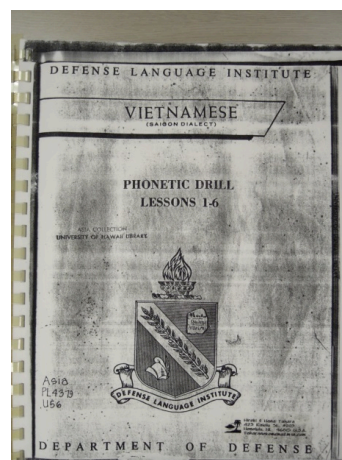
ドイモイ政策の定着とともに、日本や韓国など資本主義国からの留学生が増え、目的も研究や外交官養成のみならず、学部学生の語学留学、民間企業派遣の語学研修社員など、学生像が多様化した。1995年には名称を *Khoa tiếng Việt và văn hóa Việt Nam cho người nước ngoài* (外国人のためのベトナム語およびベトナム文化学部) に変更した。この時期、ハノイには常に100人から200人、後述するホーチミン市には日本人や韓国人を中心に300人前後の長期・短期留学生が存在するという時代が始まった。さらに1999年にはこの学部において留学生を対象とした学士教育が認められた。

2008年には「外国人のための」が抜け落ちて、*Khoa Việt Nam học và tiếng Việt* (ベトナム学およびベトナム語学部) と再度名称変更された。従前は「ベトナム語」、「ベトナム文化」と順序であったものが、「ベトナム学」と一層大きなラベルになり、「ベトナム語」は(少なくとも)部局名称のなかでは格落ちしてしまった。教員構成については、かつては言語学、ベトナム語学プロパーが大多数だったところ、現在は文学、社会学、文化人類学などの専門家が寄り合う、ベトナム研究のデパートの様相である。何よりも、「外国人のための」ではなくなったこと、つまりベトナム人学生も受け入れるようになった、この大きな変化にも瞠目すべきであろう。

2.2 南部におけるベトナム語教育史

南部でのベトナム語教育については、本来ならば1975年以前の旧ベトナム共和国(南ベトナム)における教育事情から論ずるべきである。しかし、資料が入手困難であること、そして本研究の主目的からは若干外れるところであり、ここでは触れない。

右写真は、ベトナム戦争中にアメリカ国防総省が作成したベトナム語教材である。ベトナム語音声のドリルブックで、複数巻からなる「シリーズ物」である。このシリーズで興味深い点は、まずもってサイゴン方言と明記されていることである。現在、ベトナム国内外で出版されているベ



トナム語教材は、若干の例外を除き、ハノイ方言に基づいている⁴。これは、ハノイ方言が現在のベトナム語正書法に最も近いからとか、6種類の声調を明確に弁別しているからとか、種々の理由が上げられるが、結局のところハノイがベトナム社会主義共和国の首都であることに起因する、すなわち「標準的」「規範的」と考えられているゆえである。

一方で、南ベトナムで従軍するアメリカ軍人には旧ベトナム共和国首都のサイゴンのベトナム語が必要だったのである。また、戦時であること、軍人向けであるためか、人称詞として *tao* (俺) や *mày* (お前) が使われていること、会話例文に社交性が全く見られないこと、命令文や尋問詰問調の会話文が出てくることなど、なかなか興味深い点も多い。

さて、ベトナム戦争後の南部ベトナムでは、中心都市であるホーチミン市で外国人向けのベトナム語教育が行われている。

1990年、ホーチミン市総合大学(現在のホーチミン市国家大学)に *Trung tâm nghiên cứu Việt Nam – Đông Nam Á* (ベトナム・東南アジア研究センター) が開設された。この時代のホーチミン市には、すでに社会主義陣営のみならず日本、韓国、ドイツ、フランス、アメリカなどから研究留学生や語学留学生が生活していた。外国人の住居選択、国内移動に制限があり、生活インフラも十分に整備されていなかった時代であり、センターは授業の提供にとどまらず、外国人学生の下宿斡旋、生活定着支援などにも積極的だった。

このセンターは、1998年12月に *Khoa Việt Nam học* (ベトナム学部) へと発展的変化を遂げ、外国人学生に対する学士教育を実施する部局となった。学部の下部組織として「言語学および外国人向けのベトナム語部門」、「ベトナム文学部門」「ベトナムおよび東南アジア歴史文化部門」の3部門がある。学部の主たる教育任務は外国人学生を対象とした学士課程教育の運営、短期および長期の語学留学生の受け入れである。

特に短期プログラムへの学生受け入れは『ドル箱』であり、力を入れている。学部関係者への聞き取りにより、年平均で200人から300人が短期プログラム学生として入学すること、学部開設の1998年からの10年間で約3000人が学習したこと、さらにこの5年で短期留学者が激増しているので、学部としては延べ4500人程度の学生に短期プログラムを実施したことが明らかになった。短期プログラムの場合には8週間、長期では1年ないし2年など、学部が定期的に関講するコースに合わせて渡越する学生がいる一方で、外国の協定大学から4週間、5週間などの「送り出し先の事情に配慮した」テラーメイドのプログラムも豊富に持っている。筆者が勤務する立命館アジア太平洋大学も、テラーメイドプログラムにより学生派遣を実施している大学のひとつである。

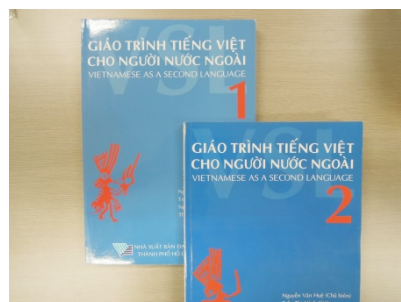
他方で、2010年には大学院も開設し、4年目を迎えた現在では既に100人以上の修士を輩出している。修士課程の定員は60人で、内訳は40人が直接に入学してくる外国人学生、残り20

⁴ この例外のひとつが川口健一ほか『こうすれば話せるベトナム語 南部標準語中心』朝日出版社、1998年。

人は韓国の大学との共同学位プログラムの学生である。

また、既に見たようにハノイでは1998年からベトナム人学生も受け入れているが、当地では2014年から受け入れ予定である。

なお、この学部は教科書編集、検定試験運営などにも熱心に取り組んでいる。グエン・ヴァン・フエ前学部長が主編者となって出版したVSLシリーズは国内外の多くの大学で使用されている。右写真は、全5巻のシリーズのうちの1巻および2巻である。この2冊はそれぞれ12課で構成されており、立命館アジア太平洋大学では週4コマの授業で「1冊1年」のペースである。



2.3. 2大拠点以外の国内状況

上記2大学以外では、ハノイのハノイ外国語師範大学、ハノイ大学、ハノイ師範大学、ベトナム学院(研究所)の4か所で外国人向けのベトナム語教育を実施している。ただし、これらの機関では、ほとんどが中国政府派遣の留学生や研究生によって占められている。また、中部のクイニョン市ではクイニョン大学においてラオス人学生向けのベトナム語センターがある。ベトナム政府は対ラオス支援の一環として、公共教育機関にラオス人学生を受けて入れていて、このセンターは事前の言語教育拠点として機能している。

さらに、ホーチミン市内には民間の語学学校が留学生受け入れに積極的であり、実際に数校がベトナム語教育を実施しているが、本稿では取り上げない。

2.4 国外の状況

まずは、日本の状況を見ておきたい。1964年に東京外国語大学に、78年に大阪外国語大学(現在の大阪大学外国語学部)にベトナム語の専攻課程が開設された。2013年現在では、上記2大学のほかに、神田外語大学および立命館アジア太平洋大学においてかなり大きな授業数と人員をもって実施されている。いずれも東京外国語大学出身の教員がその任に当たっている。また、以前には名古屋商科大学もベトナム語教育に力を入れていたし、福岡大学人文学部では東アジア地域言語学科で数年おきに特殊講義として開講されている。

韓国では、ベトナム語教育はいつそうに盛んである。韓国外国語大学、中央大学、プサン外国語大学などにベトナム語専攻やベトナム語学科が設置されている。いずれもハノイやホーチミン市から母語話者教員を招聘している。

韓国におけるベトナムに関する興味関心の度合いは日本におけるベトナムに対する注目度よりも格段に高い。また、日本の経済界は大企業の進出を待つ傾向がある一方で、韓国では中小、零細、さらには家族経営の企業も次々にベトナム進出を果たしている。ビジネスの「現地化」

も盛んであり、よってベトナム語学習熱の高まりは、ビジネス、そして現地生活での必要性に迫られて、という見方もできよう。

商業、経済活動の中心であるホーチミン市在住の韓国人は約10万人、他方で在留日本人はおよそ1万人であり、コミュニティの規模も当然に人口差を反映している。ホーチミン市国家大学の留学生、正規課程学生も今や大半が韓国人であり、日本人は減少しつづけている。

ベトナム語学習を支える出版物を見ても、プサン市内の主要な書店の外国語コーナーにはベトナム語コーナーが棚ひとつを占め、辞典やドリルブックは平積み、面出しとなっている。日本では、神田駿河台の三省堂に出かけても、書棚1列で終わってしまうのに、である。

次にヨーロッパを見てみると、旧宗主国であるフランスでの教育、研究はもちろんのこと、ビロード革命以前の旧東ドイツ、ポーランド、チェコでベトナム語教育が実施されていた。東ドイツ、チェコではベトナム本国からの招聘教員が教壇に立っていた。

筆者がベトナムで外国語教授法を習ったT教授は東ドイツ帰りだったし、留学生時代のホーチミン市総合大学ベトナム・東南アジア研究センターの幹部だったT女史は約3年にわたるカレル大学での教員生活を終えて帰国し、職場復帰したところであった。

なお、筆者はカレル大学を1999年に2回視察してきたが、ベトナム語堪能なチェコ人教授、チェコ人と結婚して永住しているベトナム人女性がベトナム語教育、ベトナム地域研究を担当していた。また、チェコ国内には約4万人のベトナム人が居住していて、プラハの街並みに馴染んでいる東洋系の人にはベトナム人、しかも北部出身のベトナム人であることが多い。

アメリカでは、ハワイ大学やUCバークレーなど、ベトナム研究が盛んな大学においてベトナム語教育が実施されている。ハワイ州には約7000人、カリフォルニア州には約100万人のベトナム系住民が居住している。日本人観光客でゴット返すワイキキを少し離れるとベトナム系寺院があるし、ワイキキビーチでもベトナム語を話す中年女性に出会ったことがある。幾度かの訪問で、ホノルルではタクシー運転手のおよそ8割、ネイルサロンと美容室に関してはほぼ100%がベトナム系住民によることが明らかになった。

ハワイでの調査により痛感したのは、我々はどうしても「外国語としてのベトナム語」に集中してしまいがちだが、ベトナム本国の視点、あるいは国外に居住するベトナム系住民の視点では「在外ベトナム人子女に対するベトナム語教育」があり、しかもこちらの方が喫緊の問題である、ということだ。

ベトナム出国の経緯や時期にもよるが、ハワイやカリフォルニアに居住するベトナム系住民の大多数が南部出身⁵で、しかも出国が早かった人たちは、現在も旧南ベトナムの正書法に依り、語彙もかつてサイゴン政権で用いられていたものを好んで使用している。ホノルルで見かけるベトナム語のチラシ、看板、コミュニティペーパーなどは基本的にこのスタイルで、筆者には

⁵ 旧南ベトナムという意味での「南」と、統一後に出国したがもともと南部ベトナム出身という意味での「南」の両方。

新鮮に感じられる。

この人たちにとっては、自分たちの言語はベトナム社会主義共和国の南部方言ではなく、ベトナム共和国の国語であり、それを今でも使っているのだ、ということだ。現代史から消えてしまった国家であるベトナム共和国の「遺物」は言語だけではなく、国歌や国旗などさまざま、YouTube などでは現在も「黄色地に赤線 3 本」の南ベトナムの『国旗』を掲げ、『国歌』を生き生きと『斉唱』するベトナム系住民の姿を見るにつけ、思いは複雑になる。というのは、子供や孫、すなわち第 2 世代や第 3 世代では一時帰国や本国からの親族来訪が盛んになり、ベトナム本国で使われているベトナム語と、自分たちが家庭やベトナム系住民コミュニティで話しているベトナム語の差異に気づき、そして傷つきはじめているからである。

この問題には本国政府も注意を払っていて、既に在外ベトナム人子女向けのベトナム語教材シリーズが開発された。教育訓練省が大掛かりな編纂チームを仕立てて完成させた教材シリーズがそれで、他方でオーストラリアに長く住んでいるベトナム人言語学者のチームが開発した教材も主としてオーストラリア国内の学校や学習組織で使用されている。

3. ホーチミン市におけるベトナム語能力試験の運用

2013 年 2 月、ホーチミン市においてベトナム語運用能力試験の運用に関する聞き取り調査を実施した。この試験はホーチミン市国家大学ベトナム学部が 2006 年から実施しているもので、ベトナム語運用能力の測定方法、到達度設定や到達度可視化の研究に資する先行事例であると考えられる。

試験は正式名称を *Thi năng lực tiếng Việt* (ベトナム語能力試験) という。2006 年に始まったが、最初の 1 年は学部内での認定試験としての位置づけであった。翌年の 07 年から、受験資格制限が緩和され、学部には籍を置かない学習者にも試験の門戸が開かれた。筆者の本務校である立命館アジア太平洋大学から派遣している短期および長期の留学生の中にも受験経験を有する者が多くいる。また、受験資格制限緩和に伴い、試験実施機関がベトナム学部からホーチミン市国家大学・社会科学人文大学長を試験委員長とする全学組織に移管し、大学公認の能力試験となった。

この試験にはレベル A (初級)・レベル B (中級)・レベル C (高級) の 3 段階がある。隔月第 3 土曜日に試験を実施しているので、通年では 6 回受験機会が発生することになる。ベトナム学部執行部への聞き取りによると、毎年 300 人程度が受験し、06 年の試験開始以来の合計受験者はおおよそ 2000 人とのことである。

次に、レベルを見ておきたい。初級であるレベル A に関しては、ベトナム学部で開発し、使用している 5 冊のシリーズのうちの第 1 巻終了で合格がやや厳しいレベル、つまり専攻語教育のベトナム語で考えれば、1 年修了プラス自己学習が必要、の水準である。レベル B は第 3 巻終了者を想定しているの、前期専攻語終了に加えて半年程度の集中的な学習を要求される。

外国人が大学院修士課程に進学する際に入学要件となるのが最上級のレベルCである。これは教科書5冊終了プラス現実のベトナム語生活が必要とされているので、前期専攻語終了後に現地に1年留学して、その「総決算」としての受験ということになるだろうか。ベトナム語専攻ではない学生の場合は、たとえば日本国内で2年ほど勉強して、さらに現地で1年半から2年程度の学習を積み重ねてようやく合格ラインに手が届くようである。

試験問題は非公表、合格率も公表されていないが、試験実施側、さらに受験経験者や合格者からの聞き取りによると、レベルCでは合格率は2割未満とのことである。また、試験問題は、たとえばレベルAでは以下のとおりである。

1. リスニング。かなり速いスピードで、聞き取りや内容判定など。5問×2セット。
2. 読解。内容正誤判定など4択問題。
3. 語彙、文法に関する出題。穴埋め形式。
4. 作文。同じ意味で文を書き換える。10題。

受験者の印象では、「主に文法力を問われる出題だった」とのことである。さらに、試験運営側の内話で、以下のような特徴が浮かび上がってきた。

1. 各レベルに6種類の問題ストックがある。
2. 時事的な問題（リスニングおよび読解）については新作問題と随時入れ替える。

試験実施は年6回、問題のストックが6種類ということは、1年経って7回目の受験で同じ問題が出てくる可能性もあり、この疑問を試験運営側に質したところ、上述のように時事問題の入れ替わりがあるが、確かに同じ問題に遭遇する可能性もありうるとの回答であった。

4. 今後の課題

ベトナム国内では、今次調査で取り上げたホーチミン市国家大学が運営する能力試験のほか、ハノイ国家大学も独自の検定試験を実施している。

そこで生じるのは「なぜ南北統一の試験ができないのか」という、素朴な疑問であろう。ハノイはハノイで長年の教育伝統を有するし、第一にベトナムの首都である、文化の中心であるという自負がある。他方、ホーチミン市は、留学生の質や量においてハノイに引けを取らない、アメリカや日本などの、いわゆる西側諸国との研究交流も盛んにやってきた、国際標準を見据えて学部設計をしているといった強みがある。

ただ、北部と南部でスタンダードが異なるのはベトナム語試験のみではない。様々な分野で「心の交流」が必要とされている現実を見れば、外国人相手のベトナム語能力試験の「統一」

はさほど重要ではないのかもしれない。ゆえに、われわれ外国人が学習者の立場から、より実効性があり、より通用性が高い「到達度測定メジャー」の必要性を唱え、意見交換の場を設けたり、共同研究を進めたりすることが重要になろう。

つまり、これから求められる議論は「日本人のための」とか「日本における」に留まらない、外国語としてのベトナム語教育全体を俯瞰する立場からのもので、まずは「何をどう教えるのか」や「何で測定するのか」などの、根本問題の整理が不可欠である。

<参考文献一覧>

- Đỗ Quang Chính (1972) Lịch sử chữ quốc ngữ 1620-1659, Tủ sách Ra khơi.
Nam Xuyên (2009) Quốc ngữ hiện đại, Nhà xuất bản Văn nghệ.
Nguyễn Văn Huệ cb. (2010) Giáo trình tiếng Việt cho người nước ngoài 1 (第4版), Nhà xuất bản Đại học Quốc gia thành phố Hồ Chí Minh.
Nguyễn văn Huệ cb. (2003) Từ điển ngữ pháp tiếng Việt cơ bản, Nhà xuất bản Đại học Quốc gia thành phố Hồ Chí Minh.
三根谷徹 (1993) 「漢字からクォク・グゥへ」, 『中古漢語と越南漢字音』, pp.199-210.
田原洋樹 (2010) 『くわしく知りたいベトナム語文法』, 白水社.

<参考サイト一覧>

- ホーチミン市国家大学・社会科学人文大学・ベトナム学部公式ホームページ www.vns.edu.vn.